高校めっちゃオモロイねん！

～障害者の高校受験と高校生活～

JICA インクルーシブ教育研修会
2016 年 9 月 13 日　松森　俊尚

１．ひとりの母親が洩らした言葉から

2001 年に大阪府は、「知的障害のある生徒の高校受け入れにかかわる調査研究校」を試験的にスタートさせました。その頃、寝屋川市内の障害者を囲んだ小さな集まりの場で、その「制度」を知った一人の母親が「この子の進路は養護学校しかないと思っていたけど、一つだけではないんですね」、ポツリとそう洩らしました。母親の心に灯った小さな光ですが、そこに託した大きな希望がありました。

小学校、中学校と地域の普通学校で友だちといっしょに学び遊んできたのに、中学卒業後の進路が障害のある生徒にはなぜ養護学校（現在の支援学校）一つしかないのでしょうか。ほかの生徒たちは高校の普通科や、工業高校、商業高校、芸術学科、定時制…、あるいは私学などと、様々な高校を選び、受験回数も複数の機会が与えられるのに、障害のある生徒にはそれがないのでしょうか。

どれだけ選択することができるのかが、自由というものの一つの、しかも重要な尺度であるならば、これは障害者の自由が奪われてしまっていることになります。

「国連障害者の権利条約」や、「障害者基本法」、「障害者差別解消法」に照らし合わせれば、障害を理由に自らの進路を選択する権利が奪われていることであり、他の生徒たちといっしょに学ぶことを阻害する社会的障壁を除去するための「合理的配慮」が提供されていないことになります。それは「差別」であると明記されています。

ぽつりと漏らした母親の言葉をきっかけにして、2002 年に市内の高校に「自立支援コース」（次項で説明）を作ってほしいと要望を掲げて、“知的障害者を普通高校へ寝屋川連絡会”をつくりました。高校受験についての情報交換や、小・中学校の様子、地域の生活などについて交流したり、また署名活動や大阪府教育委員会との話し合いにも取り組みました。

「みんなといっしょに高校へ行きたい」との声の広がりを示すかのように、さらに地域を広げた北河内の各市からも障害児童・生徒や保護者、支援者、小・中・高校・支援学校の教職員などが参加するようになって、2006 年に“知的障害者を普通高校へ北河内連絡会”と改称して現在に至っています。

２．希望する人が誰でも入れる高校に

現在大阪府内に、知的障害生徒の特別入学枠をつくっている「自立支援コース」のある高校は 11 校（内２校は大阪市立高校）、高等支援学校に籍を置きながら普通高校に通う「共生推進教室」のある高校は８校あります。入学定員は３名なので、例えば一般高校の平均入試倍率が 1.15 倍に対して自立支援コースが 3 倍を超える時もあるなど、障害者の間に受験競争が起こってしまう現実も生まれます。

他の高校も受験を拒否する学校はありませんが、「ただし、入学試験に合格してください」との条件が付くことになります。そこで、中学校、受験する高校、教育委員会と相談し話し合いながら、様々な受験上の配慮事項を考えることになります。別室受験や、問題用紙の拡大、問題用

紙の中に回答欄を設ける、代読・代筆受験、時間の延長…などといった具合に。

しかし、点数でふるいにかけて合格・不合格を決める今の入試制度では、「点数を取ることができない」のが障害である知的障害者に対しては、受験上の合理的配慮が全くなされていないといわねばなりません。高校進学率が全国平均でも 98%を超える時代になりました。高校で学びたい、友だちといっしょに高校生活を過ごしたいと希望する人が、誰でも入学できる「高校全入制度」の実現が求められます。

３．高校めっちゃオモロイねん！

経験的に言えば、普通高校に入学した障害者のほとんどが異口同音に口にすることがあります。高校生活は面白い、と。しかもその言い方が半端ではないのです。車いすを揺らせて、お尻が飛び上がらんほどに腰を浮かせながら声を絞り出したり、言葉にならない気持ちを全身をねじらせのたうつ動きで表したり、大きな目を輝かせて、唯一動く瞼(まぶた)を大きくバッチンバッチンと閉じることで意思を伝えたりと、それぞれができる表現方法を最大限駆使して、「高校めっちゃオモロイねん！」というのです。

元小学校教員の身としては、こちらとて決していい加減にやってきたつもりはなく、みんなで楽しく取り組める授業や行事をああしたらどうか、こうしたらなどと話し合い工夫しながら、それなりに一生懸命に取り組んできたつもりではあるのですが。もうちょっと「小学校中学校も楽しかったけど」とか何とか、付け加えてくれてもいいじゃないか、なんてちょっぴり嫉妬心まで湧いてきそうになるくらいです。

４．友だちといっしょにいるから面白い

ではなぜ高校生活はそれほど楽しいのでしょうか。脳性マヒのある現在公立高校 2 年生のレンさんは、青春真っ盛りです。朝はお母さんが車で学校へ送ることからはじまるのですが、近づくと「オカンを見られるのがうっとおしいからおろしてくれ」というようになりました。以後、一筋手前で車から降りて、通りかかった友だちが車いすを押しながらいっしょに校門をくぐります。

友だちが校舎内の移動を手伝ったり、授業の準備やテイクノートをしてくれたり、昼休みには弁当の介助をしてくれたりと、校内ではいつも友だちといっしょです。早弁（ハヤベン)まで介助してくれる友だちもいるそうです。

文化祭の打ち上げや、友だちのライブを見た帰りに、にぎやかに河原で集まっていると２回パトカーが来て、１回は逃げられたけど２回目は補導されたこともありました。その時、友だちが「レンのお母さんが迎えに来るから、レンだけは見逃してやってくれ」と警察に言ってくれた…などなど、高校生活の武勇伝は尽きません。

15 歳の年齢になって、これまで四六時中隣に付いて世話をし、見守っていた親や教員、介助員の大人から、少しずつ離れて行く距離感を実感するのかもしれません。すぐ横に大人が張り付いている相手に「恋バナ」を打ち明けたり、人生の苦悩を相談する若者なんてあるわけないですものね。社会や暮らしや自立というものを、少しずつ感じ始めているのかもしれません。

生徒だけではありません、「高校に入ったらホンマ楽になったわ」と、笑顔をこぼして語る保護者にもたくさん出会います。ついていけるやろか、イジメにあうのではないかなどと、不安をよぎらせていた心の内を明かすかのように、安堵と嬉しさがあふれだす表情です。

５．特別な施設・設備や専門的知識が、むしろ障害児を引き離してしまう

ユウタロウさんのお母さんは、「あの中学校の時の悩みはいったいなんだったのか」と、ため息まじりに言われました。親の付き添いを求められたり、教室で痰の吸引ができなかったり、修学旅行をリフト付きバスでみんなといっしょに行きたいという願いが最後までかなえられなかったり…と、一つ一つの問題を学校と話し合い、時には教育委員会も入って激しい言葉でやり取りした経験を思い起こしながら、それが高校に入るとどれも当たり前のこととして実現している現実を前に、「夢を見ているようだ」と表現されました。

高校には支援学級がありません。支援学級担任もいません、特別な施設・設備もなく、専門家もいません。むしろ、だからうまくいっているようにすら聞こえてくるのはなぜなんでしょうか。

入学した以上ユウタロウさんを在籍生徒として守り育てる義務と責任が高校側に生まれます。当然教員は不安になります。ユウタロウさんのことがわからない。いったい何をどうすればよいのかと。だから教員はどうしたと思います？ユウタロウさんのことが一番わかっているのは親なんだからと、お母さんに聞いたのです。「ユウタロウさんのことを教えてください」と。お母さんは、合格発表のあったその日のことだったので、驚いてしまい、とびあがらんばかりに喜びました。不思議でしょう、当たり前のことを聞かれただけなのに？「先生の方からこんなことを聞かれたのは、初めてだ」というわけですが、またまた不思議に思いませんか？

学校では「ユウタロウさんの障害のこと」については質問されたり、話題になったりするけれど、一人の子ども・人間として「ユウタロウさんのこと」を話し合っているような気がしないといわれているように聞こえるんです。

学校は、「ユウタロウさんの障害のこと」を医師や、大学の専門家や、支援学校のアドバイザーなどに聞いて、障害に対する専門的知識と対処方法を教えられ、その知識を通してユウタロウさんを見て、親と話をするような構図が生まれてしまいます。

特別支援教育の実績と蓄積のある学校や教師ほど、専門的知識や方法というフィルターを通して子どもを見てしまう、保護者とかかわってしまう傾向があります。障害児だけではありません、一人ひとりの子どもと全人格的な向き合い方、関わり方をするのではなく、教育的な専門性、知識、方法を通してしかかかわることができないような、大きな病弊が現在の教育・学校を覆っているように私は考えています。

ユウタロウさんのいる高校では、教員がざっくばらんに保護者に話し、質問したり、相談したりしながら、授業の方法や、移動の方法、休み時間の過ごし方、クラブの関わり方などを、工夫して取り組んでいます。情報は教職員全員に知らせ共有しているように見えます。

教師たちの関わる姿を自然に目にする生徒たちは、ユウタロウさんに声をかけ、介助をしたり、当たり前にいっしょに授業を受けています。支援学級も、特別な施設・設備もないけれど、教員や生徒たちの普通のかかわりの中で、まさにインクルーシブな学校が出現しています。